合志楓の森中学校だより

楓の森

R6.1.31（第 10 号）
文責：渕上 佳宏

危機を危機感として

令和六年度が明けるも間もなく能登半島地震が発生しました。犠牲になられた方の冥福をお祈りするとともに、今もなお避難生活を続けている被災者の方々へ、心よりお見舞い申し上げたいと思います。既に生徒会で取り組んだ募金活動に留まらず、八年前、熊本地震を経験した私たちだからこそ、何かできることはないか、生徒とともに考えていきたいと思っています。

話は変わります。県立高校に本校生の兄姉がいる保護者の方はご存知かもしれませんが、県立学校には「スクールサイン」といういじめ通報アプリが導入されています。この事業は、私（校長）が、県教育庁の高校教育課に勤務している際、担当し立ち上げました。新規事業なので、新たな予算枠を獲得しなければなりません。「スクールカウンセラー活用事業」のような補助事業（これも担当）であれば、「紐付き」ではありますが、国が二分の一（または三分の一）を補助するので、県分の予算も比較的付きやすいものです。しかし、一般財源から予算を獲得するのは至難の業。いわゆる「単県」で、しかも新規の事業となれば、担当者には「戦う覚悟」が必要でした。

まず初年度は、数校の指定校を対象としたベータ版でスタートしました。また、業者との交渉によって、格安の委託料になったので、財政課は渋々、予算を認めてくれました。そして、その運用の中で、データを収集し、事業の効果を訴える資料を作成しました。次年度はその資料を根拠に、予算枠を拡大し、その繰り返しによって、数年後には、今日の全県立学校を対象にした事業にまで成長しました。

誰も言ってくれないので、自分で「よく頑張った」と褒めたいところです。しかし実は、この事業の立ち上げに成功した主たる理由（背景）は、別のところにあったと、私は思っています。それは、当時の県立高校で、二件の生徒の自死事案が発生していたことです。これらの事案には、「いじめ」がその要因としてあったとされていますが、その是非については、ここでは言及しません。しかし、マスコミの報道やＳＮＳの拡散等を通じ、県議会議員の皆様はもちろん、多くの県民の関心事になっていたのは事実です。県議会の一般質問の中でも、数回取り上げられました。つまり、いじめ問題については、県全体に「何とかしなければ」という一定の危機感が漂っていました。このような時代の雰囲気（いわば世論）が、いじめ通報アプリの事業立ち上げを後押ししてくれたのではないかと思っています。

何度もこの学校便りに取り上げている「深刻な学校の教員不足」。私は大きな危機感を抱いています。しかし、その危機を「現場の先生の大変さや多忙感」という切り口で語られると、「大変なのはどの業種も同じ。人材不足は学校だけでない」と片付けられてしまう気がします。危機が本当に訪れるのは、今、学校で教育を受けている子供たちが大人になる十年、二十年、三十年後の世の中ではないでしょうか。その頃の日本が、世界との競争と共存を両立させながら、日本人が社会的にも精神的にも豊かに生きていられるのか、そのための議論をしたいものです。

プログラミングの授業を通して

三年生については、先週までの私立・国立の専願・奨学・推薦入試に続いて、今週一日には公立高校の前期選抜が実施されます。進路選択もいよいよ天王山といったところです。。

そのような中でも、実技教科の授業は時間割通りに行われています。音・美・保体・技家も、三年間の学習成果が、合否の資料にされますが、学力試験そのものは実施されません。そのため、この時期になると、意図的にサボったり、「内職」したりする生徒が、私（校長）の過去の経験上はいました。ただ、これも私の経験上ですが、このような生徒たちの入試結果は、概ね芳しくなかったと記憶しています。

ところで現在、技術分野では、プログラミングを学習中です。すでに「双方向性のあるコンテンツ（Ｗｅｂページ やＳＮＳ等）のプログラミング」を終え、「計測と制御のプログラミング」に移っています。具体的には、光センサーにより自動化する「歩行者用信号のモデル」や、接触センサー等により自動化する「お掃除ロボットのモデル」などです。エディタソフトを使い、ビジュアル的にプログラムしていくので（テキストプログラムは高校）、作業としては簡単ですが、プログラミング的思考を働かせないと、思い通りに機械は動いてくれません。そんな中、私は、驚くほど柔軟で論理的な頭脳を持っている生徒を何人も見つけました。ぜひ、そういう才能は、自分のキャリアに活かしてほしいと思いました。

夜と昼とでは動作が違います

学校HPの
QRコード